

猿橋
小学校

瑛玖良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

違いを認め合える社会

校長 澁谷 一男

雨に打たれるほど誇らしく顔を上げ、その輝きを増す紫陽花。その微妙な色合いの違いは、根を張っている土壌の性質によるものだという。

童謡「ぞうさん」の作者 まどみちおさんは、生前、この歌について次のように語っている。

「ゾウの子は、鼻が長いねと悪口を言われた時に、しょげたり腹を立てたりする代わりに、一番好きな母さんも長いのよ、と誇りをもって答えた。それは、ゾウがゾウとして生かされていることがすばらしいと思っているからです。だからこの歌は、ゾウに生まれてうれしいゾウの歌、と思われたがっているでしょう。

目の色が違うから、肌の色が違うからすばらしい。違うから、仲良くしようということです。」

＜阪田寛夫 作「まどさんのうた」より＞



子どもは人の輪の中で育つものである。友達や周りの大人、いろいろな人たちと関わり合う中で成長していく。

猿橋小学校の671人の子どもたち。得意なことや苦手なこと、受け止め方や感じ方、成長のスピード…、当たり前なことだが一人一人みんな違う。中には、自分の思いをうまく伝えることが苦手だったり、特定の学習の理解に時間が掛かったりして、日々困り感をもって生活している子もいる。

大切なのは、ちょっと人と違って、それがすばらしいこと、素敵なことだと認め合えることだ。それは多様性を尊重できることであり、心の豊かさの証しであると思う。そんな学校には「いじめ」など決して起こらないだろう。一人一人がお互いを尊重し合い、どの子も温かな人の輪の中で成長していく、そんな学校を目指したい。

子どもが人の輪の中で育つなら、子どもを取り巻く大人も大切な環境だ。大人同士が互いを理解しようとせず、責任を押しつけ合っているような環境では子どもは育たない。大人も子ども一人一人の違いを尊重し合える温かな輪を作り、柔らかな気持ちで連携できたら、きっと誰もが居心地のよい地域、真に豊かな社会が実現できるのではないだろうか。

未来を担う子どもたちに、私たち大人がそんな社会を引き継いでやれたら、どんなにすばしいだろう。

さて、今年の夏、子どもたちはどんな関わりの中で、どんな成長を遂げるか。長い夏休みが始まる。